

それでは、**マタイの福音書 15 章 32 節から 39 節**まで、終わりまで、こちらを1度初めに通してお読みいたします。皆さんも目で追って頂きたいと思います。『<sup>32</sup>イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた。「かわいそうに、この群衆はもう三日間もわたしといっしょにいて、食べる物を持っていないのです。彼らを空腹のままに帰らせたくありません。途中で動けなくなるといけないから。」<sup>33</sup>そこで弟子たちは言った。「このへんぴな所で、こんなに大ぜいの人に、十分食べさせるほどたくさんのパンが、どこから手にはいるでしょう。」<sup>34</sup>すると、イエスは彼らに言われた。「どれぐらいパンがありますか。」彼らは言った。「七つです。それに、小さい魚が少しあります。」<sup>35</sup>すると、イエスは群衆に、地面にすわるように命じられた。<sup>36</sup>それから、七つのパンと魚とを取り、感謝をささげてからそれを裂き、弟子たちに与えられた。そして、弟子たちは群衆に配った。<sup>37</sup>人々はみな、食べて満腹した。そして、パン切れの余りを取り集めると、七つのかごにいっぱいあった。<sup>38</sup>食べた者は、女と子どもを除いて、男四千人であった。<sup>39</sup>それから、イエスは群衆を解散させて舟に乗り、**マガダン地方**に行かれた。』**マガダン地方**というのは、**マグダラ**とも言います。あの**マグダラ**のマリヤの出身地です。前回の内容も是非思い出して下さい。イエスはツロとシドンの地方に行かれて、そこは異邦人の世界、ユダヤ人が住んでいない異教徒の世俗の世界でありました。今読んだ **32 節から 39 節**の舞台もまた異邦人の世界であります。それは並行記事を読むとよく分かります。それは後で開きたいと思いますが、今読んだところで皆さんに考えて頂きたい事は、イエスがなされた驚くべき神の御業、奇跡です。それを誰も求めていないのです。イエスに誰も求めていない。イエスに誰も願っても、祈ってもいない。そしてイエスがその様な御業をなさるといふことも誰も信じていないわけです。にもかかわらず、誰も願わない、誰も求めない、誰も祈らない、誰も信じないのに、それでもイエスは神の働きをなさったわけです。それでもイエスは人々の必要に応えられたのであります。何故か、というところも考えて頂きたいと思います。

私たちが願わなければ、祈らなければ、求めなければ、信じなければ、神は何もして下さらないと思いがちです。そうでもないということも、この記事を通して教えられます。聖書学者の中には今読んだところを、**マタイの 14 章**に記録される五千人の給食の奇跡と同一視する者もあります。何故そのように思うのかと言いますと、弟子たちはイエスの五千人の給食の奇跡を体験しておきながら、その直後に四千人の給食が実行可能だということ信じられないでいます。もう既に五千人の給食、女子供を入れれば 1 万五千人以上は居たと思います。それを既に弟子たちは体験しているのに、それ以下の人数を相手にイエスが奇跡を行なえない。そう思ってイエスに質問したり、イエスを信じようとしていない、イエスに求めようとしていない。そういう姿が今読んだところに見られたわけです。五千人の給食を体験しながらも、その直後に、1 章すぐ後に四千人の給食。それが実行可能だと信じられていない弟子たちの姿を見て、その聖書学者たちは「まさか弟子たちはそこまで愚かじゃあないだろう」と。ですからこれは同じ記事であると。重複記事だとそのように判断するわけです。でもそれは勝手な判断で、勝手な思い込みであって、私はそのようには全然思っておりません。むしろ、**14 章**の奇跡と **15 章**の奇跡。確かに似ているところがあります。パンと魚が使われています。でも厳密によくよく見てみると、大分そこには差があるということ、違いがあるということにも気付くと思います。まず人数からですが、**14 章**は五千人の男性。で、**15 章**では四千人の男性たち。1,000 人も人数が異なります。で、**14 章**の方では、その五千人の給食の方では **5 つ**のパンと **2 匹**の魚が用いられたわけですが、この **15 章**の奇跡の、四千人の奇跡の方では、**5 つ**ではなくて **7 つ**のパンと、魚に関しては数はそこには言及されていません。複数のいくつかの魚。7 つのパンといくつかの魚。7 匹いたのかもしれませんが分かりません。そして五千人の給食の記事では、**14 章**の方では群衆たちは草の上に座ったとあります。その一方で **15 章**の方では、地面の上に座ったとあります。草の上も地面も同じじゃないですか、と思うかもしれませんが、草が生えていた時期というのはちょうど 3 月から 4 月の過ぎ越しのお祭りの春のシーズン。それが終わると雨が降らなくなって乾燥して地面には

草 1 本も生えないカラカラに乾燥した荒地になるわけです。15 章ではまさに草の生えていない地面に群衆は座るんです。ですから季節としては夏であると考えられます。冬には食べ物を持たずに移動したりすることはまずありませんから、少なくとも季節は夏であると想定出来ます。14 章の方では春、15 章の方では夏。で、14 章の五千人の奇跡の舞台はガリラヤ湖の北のベッサイダというその付近です。その一方で 15 章の舞台、これは明記されていませんが並行記事を見て頂くと、それはマルコの福音書 7:31 から 8 章にかけて、そこにはちゃんと地名が載っています。マルコの福音書 7:31 から 8 章にかけて同じ記事が載っています。そこを見るとデカポリスという場所でイエスは四千人の給食の奇跡を行ったというふうに記録されています。ベッサイダはガリラヤの北、デカポリスはガリラヤの東です。ロケーションが違うわけです。また 14 章の五千人の奇跡、五千人の給食の奇跡の後、人々は、群衆はイエスを王にしようとした。そのことはヨハネの 6 章を見ると分かります。しかし 15 章の方では、四千人の給食の奇跡の方ではそうした事実は並行記事のマルコの 8 章にも記録されていません。また 14 章の五千人の給食の記事では、給食の後パンと魚は余ったんですが、14 章 20 節に 12 のカゴいっぱいになったとあります。その“カゴ”という言葉と 15 章の四千人の給食の奇跡でもパンと魚は余って、そしてやはりお土産が出来るんですが、その時もカゴが使われます。その“カゴ”という言葉はそれぞれ別のギリシャ語が使われております。14 章 20 節のカゴと言う言葉はギリシャ語で「コフィノス」と言います。これは欄外を見て頂くと分かるように、大型のカゴと説明があります。で、15 章の方のカゴ、これはギリシャ語では「スピリース」と言います。同じ言葉が使徒の働き 9:25 に使われています。そちらを見て頂くと、このカゴの大きさがどの程度のものか分かると思います。使徒の働き 9:25『そこで、彼の弟子たちは(パウロの弟子たちは)、夜中に彼を(パウロを)かごに乗せ(スピリースです。)、町の城壁伝いにつり降ろした。』このスピリースは男性 1 人が乗ることの出来るほど大きなカゴだったということです。その一方で五千人の給食の時に使われたカゴ、それも大型のカゴですがそちらは人が入るほどの大きなカゴではないということです。そのカゴ 12 個に、パンと魚が詰められたわけです。一方で四千人の給食の方では、人が、男が 1 人入ることが出来るような超大型のかご 7 つに余ったパンと魚が詰められたということです。そう考えるとだいたい余ったパンと魚の量はトントンだったのかもしれない。五千人の給食の方では 12 のカゴいっぱい。四千人の給食の方では 7 つのカゴいっぱい。同じぐらいの量になったのかもしれないし、もしかしたら四千人の給食の方がもっとたくさんのパンと魚が余ったのかもしれない。こういった違いを見て頂いても、14 章の五千人の給食と 15 章の四千人の給食。これと同じ出来事と見るにはあまりにも無理があるかと思えます。それに加えて 16 章 9~10 節もちょっと皆さんに目を留めて頂きたいと思えます。イエスが言及しています。『<sup>9</sup> まだわからないのですか。覚えていないのですか。五つのパンを五千人に分けてあげて、なお幾かご集めましたか。(12 かごです。)<sup>10</sup> また、七つのパンを四千人に分けてあげて、なお幾かご集めましたか。(7つのかごです。)]』イエスも明言しているんです。五千人の給食と四千人の給食、これは全く別の出来事だったということです。にもかかわらず、聖書をろくに読んだこともない自称聖書学者たち、特に自由主義神学の人たちは「これは同じ記事だ」と。従って多少の違いがあってもそんな細かいことにこだわる必要は無い。彼らはいい加減な聖書の読み方しかしませんから、聖書もいい加減な解釈しかしないわけです。同一の出来事と見るのは明らかに間違っております。

それにしましても弟子たちはこの 15 章からしますと 1 章手前のその 14 章における五千人の給食の奇跡を目の当たりにしながら、どうして四千人の給食においてはあたかもイエスにはそのような力がないかのような、信じていないかのような、そういう態度を取ったのでしょうか。「このへんぴな所で、こんなに大ぜいの人に、十分食べさせるほどたくさんのパンが、どこから手にはいるのでしょうか。」なんて言うのは愚問です。五千人の給食をしたわけですから。「待ってました。ここにパンがあります」と、実際彼らは持っていたわけです。7 つも。前は 5 つしかなかったんですが。ですから期待出来たはずなんです。にもかかわらず、弟子たちはまるでそんな事実がなかったかのような、そんなリアクションをしています。どうして信じていなかったのでしょうか。そこまで弟子たちは鈍感だったのでしょうか。愚かだったのでしょうか。でもひょっとしたら私たちの中にも「同じ奇跡は二度と繰り返されない。あの時は凄かった。神様は大きなことをなされた。でも流石に今回ばかりは、同じような事は二度とないだろう。」そのように思い込んでしまう、

決めつけてしまう節が私たちの内にはないでしょうか。悪いことについては「二度あることは三度ある」と、そういう信仰を持っていますが、良いことについては「さすがに二度はないでしょう。三度もないでしょう。そんな奇跡は二度も三度も起こるものじゃない。」と、どっかでそう思っていないでしょうか。

二千年前のこの四千人の給食の時代に今からタイムスリップをして頂きたいと思います。当時の状況、弟子たちの心情、弟子たちの立場、視点に立ってもう一度この物語を検証して頂きたいと思います。まず舞台から。ガリラヤとデカポリス、それは全く異なる地域だということを頭の中にイメージして頂きたいと思います。ガリラヤはイエスが宣教の本拠地、拠点、宣教センターにしたところであります。そこではイエスが数々の奇跡の御業を行い、山上の説教もしたところでありました。その一方でデカポリスはどういうところなのでしょう。さっきちらっと触れました。そこは異教徒の世界です。信仰者の住んでいないところです。言わばノンクリスチ안의暮らしているような全くの世俗の地域という感じです。“デカポリス”という名前の意味は、10の都市という意味です。10の都市国家からなるその地域をデカポリスと言うわけです。“ポリス”というのが都市、“デカ”というのが10というギリシャ語です。現代のヨルダン、パレスチナ、シリア、その地域にまたがったところです。そもそもはあのアレクサンドロス大王の後継者たちが建設したところです。ですからそこはギリシャ文化の中心でありました。イエスの時代ローマ帝国が治めてはいましたが、このデカポリスに関してはローマ帝国から免税特権が与えられていました。特別な地域。自治通商同盟が結ばれていたところです。このデカポリスにはそれぞれ議会を持つことが許されていて、周辺地域を自治支配することが出来たんです。ローマとは違う貨幣の鑄造権もデカポリスには与えられていました。全く違うお金も使っていたわけです。裁判権も与えられていました。また暦に関する、カレンダーに関する権限も与えられていました。ですから全くのローマとは違う国として特別な自治権が与えられていた地域だということも頭に浮かべて頂きたいと思います。宗教としてはギリシャの宗教ですからゼウスと、そしてアフロディーテという女神の神殿がそこには建てられておりました。円形劇場もあって、スポーツだとかエンターテイメントも盛んに行われていました。世俗的には繁栄し、隆盛を極めていた地域、それがデカポリスというところです。全くの非キリスト教世界をイメージして頂いてもいいと思います。善光寺のお膝元の長野市をイメージして頂いてもいいと思います。そこはもう善光寺一色。そこはゼウスだとかアフロディーテといったギリシャ神話の神々が満ち溢れて、完全に世俗化しているところです。

そういうところでイエスは四千人の給食の奇跡を行われたわけです。五千人の給食を経験しながらも、四千人の給食を行うことが出来ないと弟子たちは本気で思って、信じていなかったのでしょうか。私はそこまで弟子たちが愚かだったとは思っておりません。何年も前、何十年も前のことだったら忘れてしまうかもしれませんが、でもそれはつい春先に行われた事。今は夏です。春に経験した事を夏に忘れるとは思えません。そこまでは愚かではあり得ないと私が考えるその根拠というのは、愚かではありえないというその疑問を解く鍵というのは、このデカポリスという地域にあると私は思っております。それこそが弟子たちの問題、信仰の障壁となったと考えます。どういうことかは今からお話するので、聞いて頂きたいと思います。イエスがデカポリスのような異教徒の暮らす世俗化した地域で、神の御業を行うなんてあり得ないと弟子たちは考えていたと思います。そんなデカポリスのような偶像の神々が祀られているようなそんな地域で唯一<sup>まこと</sup>のイスラエルの神の奇跡を行うなんてあり得ない、あってはいけない。そんな連中に奇跡を持って給食を行うなんてそんな事はあろうはずがないと、弟子たちは考えていたと思われます。もう既に三日間も飲まず食わずでいます。一方で五千人の給食の舞台がガリラヤのところ、ベツサイダのところでは翌日にはイエスは奇跡を行っているんです。でも、もうここでは3日経過している。今の時代と違って昔は毎食食べれたわけではありません。1日3食きっちり欠かさず食べていたわけではありません。2食とか1食とか場合によってはご飯も食べれないなんてことも普通にあったと思われます。ですから3日ぐらい食べなくてもそれは不思議なことではなかったと思います。今だったらもう3日間も食べなければもう死んじゃうとか思うかもしれませんが、当時は3日さすがにもうそろそろ限界が来たと言うところです。ですから弟子たちはイエスが前回の五千人の給食ではもう翌日に奇跡を行っていたわけですから、この地域では翌日になっても奇跡を行わない、2日経っても奇跡を行わない、3日たっても行わない。これはもう行わないだろうと踏んでいたのかもしれませんが。ですからまず第一にデカポリスというその地域

が相応しくない。ロケーションがもう異教徒の異邦人の地域ですから、そんなところでは神の御業をイエスが行われるはずがない。相手も相応しい人たちではない。デカポリスの人、完全に異教徒です。ユダヤ人ではありません。神の民じゃないんです。異邦の民です。こんな人たちのために何かしなければならぬのか。ユダヤ人の男性から見れば、特に異邦人の男性なんていうのはただの犬です。犬に餌なんかくれなきゃいけないのか。犬といっても野犬のような家畜を襲ったり、人間の死体を食いあさるような野蛮な連中。そんな野犬に食べ物なんかくれる必要は無い。また当時のユダヤ教のラビから彼らは聞いていたと思います。「異邦人は救いには与らない。救われるのはアブラハムの子孫だけ。では何故異邦人は生きているのか、存在しているのか。それは地獄の炎を絶やさないための薪として生かされているだけだ。彼らが死んだら地獄に行って、その火が永遠に消えないように、そのために存在しているだけ。だからそんな異邦人に何か良いことをしてやる必要は無い。ただどうせ彼らは地獄に落ちて薪になるだけだから。火で焼かれるだけなんだから。そんな彼らに親切にしてやろうとか、そんな彼らに奇跡の御業を見せてやろうとか、そんな必要は無いじゃないか。」と弟子たちは考えていたに違いありません。だから五千人の給食を春に経験しても、別にデカポリスでイエスが同じような奇跡を行うとは夢にも思っていなかった、というのが弟子たちの心情だったと考えられます。

で、これは勿論私たちにも適用出来る話です。アプリケーションを考えて下さい。同じことが私たちにも起こるといふことを知って頂きたいと思えます。イエスは昨日も今日もいつまでも同じ方だと言われています。イエスは今も生きて働いて下さいます。イエスは今も大いなる御業をなして、大いなる祝福を私たちに与えて下さいます。イエスは今でも奇跡を行なうことが出来るんです。今でも奇跡の給食を行うことが出来ます。私たちの必要に応じて下さるんです。私たちに驚くべき神の恵みが示されるんです。皆さんもそういう経験をされていると思えます。「これは奇跡だ。神様は、こんな私にも給食して下さいました。素晴らしい奇跡を見せて下さった。2013年の春にイエスは驚くべき御業を私に見せて下さった。」でも、この夏にあの時と同じような状況を迎えて、そして秋でもこの時期でもいいですがつい考え込んでしまうわけです。何故かと言いますと、前回はあの時神が、イエスが、私のために行って下さったその奇跡の状況、それを分析するに「あの時は確かに困難な状況だった。大きなニーズを抱えていた。そこにイエスは奇跡的な恵みの御業をなして下さいました。でも、今回はあの時とは少々状況が異なる、大分異なる」と。「なぜならばあの時は私はガリラヤにいたんです」と。「あの時、私は毎日聖書を読んでいました。あの時、私は何かと言っては神に祈っていました。あの時、私は教会に通っていました、熱心に欠かさず。日曜日よりも平日のバイブル・スタディーだって熱心に通っていました。毎朝デボーションも欠かさず行っていました。あの時は、私はガリラヤにいたんです。イエスが身近にいたんです。感じられたんです。でも、今は私はデカポリスにいます。もう聖書は毎日読んでいません。かろうじて日曜日ぐらいは教会に行くことがあっても、でも、よく休むようになりました。教会に行かなくなりました。教会から遠いところに身を置いています。私は今、ガリラヤに居ないんです。今、デカポリスにいます。周りにはクリスチャンはほとんどいません。いつもつるんでいるのはノンクリスチャンとばかり。最近よくノンクリスチャンとよく時間を過ごすようになりました。(もちろんノンクリスチャンと時間を過ごしてはいけないという意味ではありませんが、)でもクリスチャンと居るよりもノンクリスチャンと一緒にいた方が何か気が楽なような感じがしています。誘われたらすぐに付いて行きます。飲み屋にだろと、カラオケボックスだろと、いかがわしいところだろと。世俗の世界にどっぷりと身を浸してあります。私は今、デカポリスにいます。でも、今困窮してしまっています。この困窮している状況は、春先のあのガリラヤにいた頃と全く同じですが、でもロケーションが違うんです。そして周りには人々も違います。ユダヤ人ではなくて、神を信じる者たちではなくて、今私は、デカポリスにいますので、周りは皆ノンクリスチャンばかり、不信仰な者ばかり。まずい時に、まずい場所で、まずい人たちと一緒にいます。そこは本来私はいるべきでない、そのことが分かっているところにいます。教会から縁遠い、ほど遠いところにいます。デカポリスにいますから、だからイエスはあの時とは同じような奇跡をおこなって下さらない。今私が直面しているこの困難に、今抱えているこのニーズに、主はあの時と同じようには応えて下さらない。あの時と同じ奇跡の御業は、もう期待は出来ない。期待してはいけないんだ」と。どこかで諦めている。どこかで決めつけている。そういうところが、もしかしたら皆さんの中に

もあるかもしれません。

どうしてそう思うしまうのか。それはあなたの中に自己義認のメンタリティが植え付けられているからであります。自己義認というのは、何か良いことをして義と認められる。行いによって義と認められる。行為義認とも言えるものです。その自己義認、若しくは行為義認のメンタリティを持つとどう考えるかという、「私たちは自分の価値の故に主から祝福を受けることが出来る。頑張ったからご褒美がもらえる。」というメンタリティです。「聖書を毎日読んでいるから。毎週欠かさず教会に通っているから。十分の一献金をきっちりしているから。教会で奉仕をしているから。福音を宣べ伝えているから。慈善活動を行っているから。だから努力している、頑張っている私には神様は必ず祝福を与えて下さる。」これが自己義認のメンタリティです。今ここにいる皆さんはガリラヤにいます。聖書を学んでいます。賛美をしています。祈っています。神の民と一緒に今この時間を過ごしています。だから神が祝福して下さいのだと。もしかしたらそう思って今晚ここに来た人もあるかもしれません。

しかし、今晚のテキストを見て下さい。32 節にもう一度目を戻して下さい。『<sup>32</sup> イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた。「かわいそうに、この群衆はもう三日間もわたしといっしょにいて、食べる物を持っていないのです。彼らを空腹のまま帰せたくありません。途中で動けなくなるといけないから。」』イエスは彼らを見て、かわいそうに思われたんです。この事実を目を留めなければいけません。この事実をついつい見落としがちであります。群衆は何も求めていません。イエスに直接お願いをしていませんし、弟子たちもイエスが何かをするように期待もしていませんし、信じていないわけです。でもイエスの方から群衆を見てかわいそうに思われたのです。そこでイエスの方から動かされたわけです。この「かわいそうに思う」という言葉。これは非常に重要なギリシャ語です。「スプラंकニゾマイ」と言います。「深く憐れむ」と訳される言葉です。このスプラंकニゾマイという言葉は、内臓はらわたとか腸を指す、スプラクラという言葉から派生した動詞であります。ですから直訳は「内臓が揺り動かされる」日本語で「腸がわななく」という言葉がありますが、ぴったりです。または「断腸の思いがする」腸が引きちぎれるような思い。断腸の思いといった激しい痛みのニュアンスを含む言葉。それがスプラंकニゾマイという言葉です。最も強い最強の憐れみを表現するギリシャ語です。「ああ、かわいそうだなあ。」という程度ではありません。彼らを見たら内臓が揺り動かされてしまったんです。腸がわなないてしまったんです。断腸の思いがしたんです。黙って見ていられない。空腹な群衆を見てイエスはスプラंकニゾマイしたのであります。誰もイエスにお願いしていません。誰もイエスを信じていません。それでもイエスはこの空腹なニーズを抱えた群衆たちの姿を見て、深く憐れんで、内臓が揺れ動いて、そして腸がわなないて、断腸の思いを持って彼らの必要に応じてあげたい。そう願われたわけです。

このスプラंकニゾマイという言葉を非常に明確に、また具体的に説明してくれている人の言葉を今から紹介したいと思います。少々長い引用ですけれども、これは前回の学びの時にも何年か前に同じテキストを教えた時にもご紹介した言葉です。日本を代表する加藤常昭つねあきという非常に有名な元牧師であり、また聖書学者の、神学者のその加藤常昭という人の言葉を今から紹介しますので聞いて頂きたいと思います。

「この深く憐れむという言葉は、スプラंकニゾマイという言葉は、少しも苦しんでいない神様が気の毒そうに人間を高いところから見下ろされるのではありません。私は何度でも喜んで説明をするのですが、深く憐れむと訳されている言葉の語源は腸はらわたです。内臓と言って良いのです。その内臓が痛む、腸が痛むという言葉であったのです。私どもと激しい同情で胸まで痛くなるということであるのです。腸が痛むほどに主イエスは同情に生きて下さったのです。いや同情という言葉ですらもうここでは不十分です。人々の愚かさに取り囲まれながら、主イエスはその愚かさを軽蔑することもせず、その愚かな事しか言うことの出来ない人々のみじめさに自分の肉体が、心が切り刻まれるような思いを抱かれたというのであります。これほどに腸が痛むほどに愛を注ぐ神というのは、当時の人の知らない神の姿でした。当時の世界の知恵者、ギリシャの哲学者も知らなかったことでした。想像もつかないことでした。福音書の用語はギリシャ語です。しかしギリシャ人はこの言葉で神について語ったことがなかったのです。むしろそれを拒否したのです。なぜかという、心を痛めてしまうような神は、自分をそのように苦しめるものに振り回されることになる。神が自分に悩みを負わせるものに振り回されるというのは、まったく神様らしくない。頭の中でそう考えて、だ

から神というのはあらゆるものを超越していなければいけない。あらゆるものを超越している神には、同情に心を痛めるなどという事はあるはずがない、と考えたのです。このギリシャ人の考え方は、よく分かります。神々だけではないでしょう。私ども人間もそうです。私どもは本能的に同情によって心がとことんまで動かされる事を拒否することができます。気づいていないかもしれませんが、そうなのです。映画や芝居やテレビドラマを見て心から涙を流し、かわいそうになどと思う事はあっても、目の前に同じ悲劇が起こった時には、私どもはそんなに簡単に涙を流したり心を痛めたりしません。何故かと言うと、うっかりここで同情し、うっかりここで心を痛めたら、この他者の悩みが自分たちの生活の中に入ってきて、たまったものではないと思うからです。だから私どもはあるところまでは同情するけれども、それ以上他者に踏み込まれる事は拒否するのです。ここで腸が痛むほどに主イエスが憐れみを抱かれたという事は、この人々の愚かさの中で自分自身が踏みにじられることをお許しになったということでもあります。ギリシャの人々の考えからすれば神にふさわしいことではなかったかもしれませんが。しかし他方今のように問い詰められてまいりますと、実はまさに神様でなければ出来ないほどの深い憐れみに生きられたのであります。人間にはこんなに深い憐れみの心はありません。私ども自身正直に認めなければならない事なのです。私どもが自分がどんなに同情深い人間、優しい人間だと思っても、こんなに深い憐れみの中で生きる事はなかったのです。それが既に私どもの罪であります。ここで述べられている神の子イエスのお姿はその通りギリシャの知者が言う意味からすればそんなに深い同情を抱いたら神が神でなくなってしまうほどでした。その通り神が神であることをお辞めになる位深い憐れみに生きられたのです。そこに主イエスにおいて現れた神の御業の秘密があります。大体神の御子がこの世にお生まれになって人々に苦しめられ続けて、十字架につけられて殺されるなどということほど神様らしくない事はなかったのです。十字架につけられたイエスを見た時に、人々は言ったのです。「神の思し召しがあれば今救ってもらうが良い。自分は神の子だと言っていたのだから。」これにも理屈は通っているのです。だがそこでそのような意味において神であられることを貫ぬかれなくて憐れみの中で自分自身の肉体を割いてしまうほどの愛に生きられる。聖書が語る神はそういう神であり、そのような神の御子のお姿であったのです。ここまで忍耐深く人々の罵り、誤解、愚かさに対して罵りを持って報いることなく、深い憐れみを抱くことがお出来になったのはそれほどまでに深い憐れみの自由に生きることがお出来になったのは、神だけしかなかったと私は信じるのです。私どもには不可能なことです。こういう主イエスのお姿を見ると私自身の愛とか同情とかいうものに絶望せざるを得ないのです。私ども自身の愛とか同情から人々のために何か出来ると思ったり、神様のために何か出来ると思うのは、傲慢としか言いようがないのです。このようなことから与えられている御言葉の中でも私どもの心を捉える 37 節の主イエスの御言葉の意味もなおよく分かってくると思います。」と。

長い引用でしたけれども、この加藤常昭という人はこのスプラUNKニゾマイという言葉の説明することを何度でも喜んで説明したいとおっしゃっています。私も何度でも彼の意表を紹介したいと思うぐらい絶妙にこのスプラUNKニゾマイという言葉がイエスが実行されたということやうまく伝えてくれていると思います。イエスはあなたの必要を、あなたの現状をご覧になって、やはりスプラUNKニゾマイして下さい。内臓が揺れ動くんです。あなたを見ると腸がわななく、断腸の思いがする。そこまであなたのことを深く憐れんで下さる。それが私たちの救い主、主イエス・キリストであります。あなたがたとエデカポリスにいたとしてもです。あなたがたとえ世俗の真っ只中にいたとしてもです。教会から離れ、クリスチャン・コミュニティから離れ、そして偶像礼拝の中に身を置く人たちと一緒につらんでいたとしてもです。毎日聖書を読んでいなかったとしてもです。それでも空腹なあなたを見てイエスは憐れんで下さるのであります。「かわいそうに。」同情するどころじゃありません。腸がわななく、内臓が引きちぎられるほど、あなたのことを憐れに思うわけです。でも、同時に私たちの敵であるサタンはあなたに近づいて、あなたの耳元でこう囁きます。「お前は今デカポリスにいるじゃないか。まずい場所に、まずい時に、まずい人々と一緒にいるじゃないか。そんなお前が神から一方的に恵んでもらえるなんて、憐れんでもらえるなんて、そんな虫のいい事はないだろう。教会にも行ってないんだぞ。聖書だって毎日読んでいないんだぞ。祈ってもいないじゃないか。全然クリスチャンとも付き合いが無いじゃないか。今はノンクリスチャンと付き合い方が楽しいと言って、デカポリスにいるじゃないか。そんなお前

が神から良くしてもらえないなんて、いくら空腹だろうと、いくらニーズを抱えていようと、いくら必要が大きかろうと、そんなお前に神が応えて下さるはずがない。」そのようにサタンはあなたの耳元で囁こうと待ち構えています。

しかしイエスはあなたの姿を見て、あなたの状況を見て、あなたのニーズを見て、深く憐れんで下さる。内臓が揺れ動くほどにです。この事実をあなたが知るならば、あなたはありとあらゆるプレッシャーや重荷から解放されると思います。主イエス・キリストはあなたの頑張りに応じて祝福して下さるのではありません。あなたが全然頑張っていないくても、あなたがデカポリスにいたとしても、どこにいようと、もしあなたが空腹になって、もう息絶え絶え。途中で倒れるかもしれない。そのような状況になったならば、イエスは必ずあなたに**スプラUNKニゾマイ**して下さい。深く憐れんで下さるんです。あなたの祈りの深さに応えるのではなくて、ただご自身の持つ憐れみ深さに於いて行動して下さるわけです。あなたの信仰深さにイエスは応えるのではなくて、ご自身の持つ憐れみ深さにただイエスは動くだけあります。ただ憐れみ深い方だから私たちのような者も憐れんで下さる。私たちのニーズをご覧になったら、黙ってはいられないわけです。私たちが困窮している姿を見たら、もう今にも倒れそうな姿を見たら、イエスは黙って見てはいられない。放置は出来ない。見過ごすことは出来ない。憐れまずにはいられない。それが私たちの信じるイエス・キリストという神です。あなたがどこにいようと、何をしよう、居るべきところに居なくても、やるべきことをやっても、それでもイエスはあなたの必要を見て「これではあなたはもうだめだ。これではあなたはもう倒れてしまう。これ以上歩けない。」そう思ったらイエスは深く憐れみ、あなたの必要を豊かに満たして下さい。溢れんがばかりに、余るほどに、7つのカゴにいっぱいになるほどに。素晴らしい神です。素晴らしい救い主です。

このことを経験するためにはたったひとつの条件だけが求められます。そのたった1つの条件というのは、イエスの近くに身を置くということです。「でも、私はデカポリスにいるんですよ。」そうです。あなたはイエスから離れているつもりかもしれませんが、イエスの方ではあなたからは全然離れていません。なぜならばイエスは「**見よ、わたしは世の終わりまであなた方とともにいる。**」とおっしゃっているからです。イエスは教会の中だけにいるんじゃない。イエスはどこにでもおられます。「こんなところにはイエスはいないだろう。権堂にはイエスはいないだろう。」と思ったら大間違いです。権堂にもイエスはいます。歌舞伎町にだってイエスはいます。どんなふしだらな墮落した世俗的なそんな繁華街の限界の中にもイエスはいて下さるんです。刑務所の中にだっています。善光寺の中にだってイエスはおられるんです。このデカポリスにおいて群衆たちはイエスとずっと一緒だったんです。イエスと一緒に居て、もう三日間過ぎていくわけです。でも、何も食べていないわけです。いよいよ空腹になりました。辺鄙な所で食料は手に入りません。このままでは途中で倒れる者も出てくるかもしれません。それでもこの四千人は、イエスには全くお願いしていません。「お腹が空きました。主よ、ご飯下さい。給食して下さい。」とはお願いしていません。彼らはイエスに祈ってもいないということです。イエスを信じてもないわけです。自分たちの信仰をここで行使しているわけじゃない、エクササイズしているわけじゃないんです。ただ単純にイエスと一緒に居ただけでおいしい思いをしちゃったということです。単純にイエスと一緒に居ただけで恩恵に預かっちゃったということです。求めてもないのに、お願いもしていないのに、信じてもいなかったのに。ただ単に神の祝福の注ぎ口の下に身を置いただけです。祝福の蛇口のイメージを頭に思い浮かべ下さい。じゃんじゃんじゃんじゃん神の祝福がその蛇口から溢れ流れています。その下にあなたが身を置くことで祝福のシャワーをあなたは浴びることが出来ます。ただそのシャワーの下に身を置くだけで、祝福のシャワーを浴びることが出来るわけです。イエスは実に憐れみ深い方です。

で、イエスはどこにでも居られると言いました。デカポリスにも居ると言いました。異教の世界にも居る、世俗の世界にも居ると言いましたけれども、でもなるべくだったらイエスを見つけやすい場所、分かりやすい場所、すぐにイエスに出会えるような場所、3日も経たなくてもいい場所。先の春に行われた**14章**の五千人の奇跡の時では、ガリラヤが舞台でイエスは1日だけインターバルを置いて五千人の給食を行いました。その一方で**15章**のデカポリスの四千人の給食の奇跡の場面ではイエスは3日間というインターバルをおきました。三日間、ちょっと時間がかかったわけです。あまり時間をかけたくないと思うならば、デカポリスよりもガリラヤのベッサイダの方がいいに決まっています。どこにでもイエスがおられるとはいえ、なかなか世俗の世界、異教の世界、教会以外の所ではなかなかイエスを

見つけるのは難しいかもしれません。大変かもしれません。時間がかかるかもしれません。手取り早くイエスに出会いたければ是非ここに来て下さい。マタイ 18:20 にイエスの言葉があります。皆さんもよく知っている言葉なので聞いて下さい。『ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。』2人でも3人でもイエスの名前によって集まるその集会のただ中にイエスは3人目として、4人目としてそこに居て下さる。ここにイエスは今おられます。ここには2人3人以上の人たちがイエスの名において集まっているからです。クリスチャンの家庭、2人でも3人でもイエスの名において集まるところには、イエスもその中に居て下さるんです。ただポイントは、イエスの名において集まるということです。自分の名前で集まってもダメです。イエスの名において集まるところ、それは家だろうと、どこだろうと、イエスがそこに必ず現われて下さる。そこで、すぐにイエスがおられるということに、その臨在に気付くわけです。そのイエスの臨在を味わえるわけです。イエスの名前によって集まるならば、エペソ 1:23、これも皆さんよく知っている聖句です。『教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです』と。この教会もそうです。この教会もイエス・キリストのからだです。いっさいのものをいっさいのものによって満たす方が満ちておられるところ、それがこのマラナサ・グレース・フェロシップという教会です。ですからイエスのいるところに身を置けば必ずあなたはイエスの憐れみを受け、イエスから祝福を思う存分浴びるように頂くことが出来ます。そしてそれは有り余るほどの、7つのカゴにもいっぱいになるほどに、お土産すらつくほどの祝福を頂ける。「それはちょっと信じられない。」と思うかもしれませんが、信じて下さい。それは事実です。私自身が、これが事実であることをいくらでも証明出来ます。身をもって、体験をもって、皆さんにこれが事実だということをお伝えすることが出来ます。皆さんの中にも確かにそうだと、アーメンだと、私もそういう経験をしてきたと言う人も、この中に多いと思います。これまでも私は信じられないような数々の祝福に与ってきました。「それはあなたが牧師だからでしょう。教会で働いているからでしょう。当たり前ですよ。」と皆さん思うかもしれませんが、そんな事はありません。そうでしたらそのように言いたいところですけども。私のたゆまぬ努力、多大な犠牲、それに神が応えてたくさん祝福を下さったと言いたいところですが、実はそうではありません。私は出来ていないのに、全然ダメ人間なのに、だめクリスチャンでダメ牧師なのに、それでも神は、イエス・キリストは、私のような者に、ただ私がイエスの傍にいただけで祝福を注ぎ続けて下さいました。私が敬虔でなくても、忠実でなくても、献身的な信仰生活を送ってなくても、だらしなくても、不甲斐無くても、いい加減でも。それでも私がイエスの傍にいれば、私の必要を見てイエスは心を動かし、スプラクニゾマイして下さいます。内臓が揺れ動く、腸がわななく、断腸の思いを持って私の憐れな状況を見て「かわいそうだ。」と祝福を与えて下さるのであります。皆さんにもイエスは同じことをして下さいます。

そもそも私がクリスチャンになったのは、私がクリスチャンになろうと思ったからではありません。きっかけは私の母がクリスチャンで私を幼い頃から物心つく前から、母が教会に私を連れて行ったから。それがきっかけでした。それがなければ、私はクリスチャンにはならなかったと思います。なぜならば自分から教会に行こうなんて夢にも思ったこともないですし、幼い頃はもう気がついたら教会に行っていて、そしてそれはもう習慣化していたので毎週毎週もう日曜日なったら教会に行っている。でもだんだん物心がついてちょっと大きくなって小学校の高学年ぐらいになると、4年生ぐらいになると、「何故教会に行かなきゃいけないのか。日曜日は休みなのに。教会はあまりおもしろくない。みんな友達をあちこち出かけている。遊びに行っている。朝からテレビを見ている。日曜日には朝から面白いテレビをいっぱいやっているのに。なのに朝から教会に行って、つまらない話を聞いて、歌いたくない歌を歌って、献金までしなきゃいけない。だんだん疑問を持つようになったわけです。それでも父も後からクリスチャンになりましたから、クリスチャンホームとして子供の私がどう思おうとどう感じようと思いたくなくても、「我が家はクリスチャンホームだから教会に行くんだ。」と、有無を言わずに行きたくないようなことを言っても、父に怒鳴られて無理矢理引きずられて車の中に投げ込まれて一緒に連れて行かれたものです。その頃は嫌で嫌で堪<sup>たま</sup>りませんでした。まあ、そのやり方・方法は正しかったとは言えないかもしれませんが、でも今から思うとそれは実に感謝なことでした。無理矢理でも教会に連れて行ってもらったこと、それは今から振り返ると有り難いことでした。そうでなければ私は教会には



行かなくなっただと思います。紆余曲折を経たんですが、でも最終的には幼い頃に教会に通っていたので、一時は教会から離れて、一時はもうイエスなんか知らない、イエスに背を向けて生きていたそんな時期はありましたけれども、でもやっぱり私には帰るべきところがある。そこに帰らなきゃいけない。それがイエスの元だということが分かっていたんです。それは幼い頃から言い聞かされてきたことだったからです。で、幸いに私は目が覚めて我に返って放蕩息子のようにイエスの元に帰ることが出来ました。17歳の時でした。で、その時に私は改めてイエス・キリストを心に個人的な救い主として迎える決心をしました。幼い頃から教会に通っていたので、てっきり自分はクリスチャンのつもりでいました。7歳の時に頭に油を塗られて、それが洗礼だと言われたので、洗礼も受けたクリスチャンだと思っていたんです。でも内心分かっていた。心の中では別にイエス・キリストを信じているわけじゃないし、好き好んでクリスチャンをやっているわけではない。教会に通っているわけじゃない。でも17歳の時には、気付いたんです。イエス・キリストが私の罪を十字架で負って死んで下さったと。そのイエスが自分の個人の救い主だと言うことに気がついたのが17歳の時で、そしてその時に改めて私はクリスチャンになると言う決心をしました。でも、それもすべて振り返れば、<sup>さかのぼ</sup>遡れば、幼い頃に母に教会に連れて行ってもらった事、それが全てだったんです。それが切っ掛けだったんです。それがなければ私は間違いなく、もう100%と言っていいと思います。私のような人間は絶対にクリスチャンにならなかったと思います。で、クリスチャンになった後、私は自分のような者のために死んでくれたような救い主、もう命の恩人以上の救い主にもう感激して感動して感謝がいっぱいで、このイエス・キリストのことを誰かに伝えずにはいられない。そういう思いに駆られました。ですからこんな私でも使って下さい。イエス・キリストを宣べ伝えるために、何か出来る事はないだろうか。色々自分の思いつくことをやってみました。高校も奇跡的に卒業することができ、将来何をすべきか。クリスチャンとして残された生涯、神様から頂いたこの命、イエス・キリストに拾っていただいたこの命を、今までのように無駄には使いたくない。できたらイエス・キリストに使ってもらいたい。いろいろ思いは巡らしたんですが、なかなかこれといったものがすぐに見つかりませんでした。よく言うところの献身して神学校へでも行って牧師にもなる。そういう道もあるんじゃないかと周りには言ったこともありましたが、私はそんな気はさらさらありませんでした。牧師にだけはならないと、どこかで決めていたんです。幼い頃から牧師を見てはがっかりしていたからです。牧師を嫌っていたんです。見下していたんです。すっかり幻滅していたので、牧師以外の道を探りながら、単純にイエス・キリストのことを宣べ伝えたい。別にどんな職業でもいいから、いろんなことを試してはうまくいかずに挫折したんですが、ある時私はラーメンが好きだからラーメン屋になろうか。そしてラーメン屋のオヤジをしながらお客さんにイエス・キリストのことを伝えられれば、美味しいラーメンと美味しい話が出来た。二重にこれはお得というふうに思って、ラーメン屋を目指しました。ラーメン屋で修行を始めたんです。でもそんな時に、その頃は勿論クリスチャンとして真面目に教会にも通っていました。その時に宣教師の人がラーメン屋で修行をしている私のところに来て、「実は私の知っている世界の宣教団体が、国際宣教団体があなたのような若者を募集している。リクルートしているという話を聞いた。海外宣教に出てみないか。条件はただ1つ。健康であれば良い。」これはもしかしたらと思ったんです。ラーメン屋も悪くないなと思ったんですが、でもまずはラーメンを極めて、ラーメン屋としてちゃんとお店を構えて自分で経営するまでには一体どれくらいかかるだろうか。ラーメン屋でアルバイトをしながらでは、なかなかお客さんに直接イエス・キリストのことを伝えるなんていうのは難しい。オーナーにもなって自分の好きなように出来ない限りは、自分の夢は果たせない。でもここで、海外宣教でもうすぐにでも私のような者を使って、イエス・キリストことを宣べ伝えられるならば、これは素晴らしい。と思った私は、何も考えずにその誘いに乗って、その宣教団体というのがOM(Operation Mobilisation)という宣教団体だったんです。その宣教団体が2隻の宣教船を持っていました。世界を船で巡るといって宣教船で、私はドゥーロス号という船に乗り込んだんです。その船に乗って特に東南アジアを中心に福音を宣べ伝えるような働きに携わることが出来ました。世界宣教に出るなんて夢にも思っていませんでした。ただ単にイエス・キリストことを宣べ伝えたいと思っていました。でもただそれだけでは生活出来ないと思っていましたから、なんとか自分の食い扶持だけは稼ぎながら、いろんな方法いろんな手段を用いてイエスのことを宣べ伝えよう。そういう事しか考えていませんでしたが、でも何の取り柄もない、ただ健康だけしか取り柄のない、頑丈な体しか

持ち合わせがない、お金もない、学歴もない、知識もない、経験もない。そんな若者の私が、神様から驚くような機会を祝福を与えられて、世界宣教の第 1 戦に出ることが出来たんです。そしてその後、私はこの OM という団体を通じて将来の伴侶に出会いました。その頃はもちろんまだ 19 歳 20 歳頃でした。結婚願望なんか全く持っていませんでした。その頃持っていた願望は、殉教願望でした。殉教願望と言うのは、世界宣教に出ていってどこかの国で迫害されて無振り殺しになって、最後は殉教してかっこよく死ぬ。それがクリスチャンとして男らしい最高の生き方だとそう思っていました。太く短く。そう思っていましたので、殉教のことばかり考えていました。ですから妻と出会った頃も妻にはいつも死ぬ話ばかりしていました。それでも最終的には妻と結婚することになったわけですが、全然結婚願望もなかったのに、殉教願望しかなかったのに。それでも私は素晴らしいかけがえのない伴侶を神様からプレゼントして頂いたわけです。信じられないような祝福です。その後、私はもちろんイエスから離れずにずっとイエスの傍にいて教会生活は続けていたわけですが、カルバリーチャペルという教会に出会ったんです。チャック・スミスが 1991 年に初来日しました。その時に私も初めてチャックのメッセージをライブで聞きました。宣教団体にイエス・キリストのことは宣べ伝えていたんですが、確かにイエス・キリストのことを宣べ伝えるには聖書の知識がやっぱり足りない。いろいろ質問されてもすぐに答えられない。もっと聖書を学びたい。そうすればもっとイエス・キリストのことを宣べ伝えられるに違いない。そう思っていましたから、御言葉を学びたいという強い渴きと願いを持っていたわけです。そんな矢先にチャック・スミスの講解説教を聞いて、これだと思ったんです。こんなに分かりやすく聖書を教えてくれる。そんな人に初めて出会ったんです。で、チャックを通してカルバリーチャペルという教会にはバイブルカレッジがあるということを知って、もうここに行くしかないと思ったわけです。それまでも所謂聖書を教えてくれる教育機関を探し回ったんです。日本全国の神学校、一通り回りました。でもそういう神学校でも既に教えていたんです。講師としてよく呼ばれて、教会とか神学校で教えていたんですが、(これは高慢で言うわけではないですけども、) 行くたびに神学生から質問を受けて聖書から私は答えていたんです。神学校も出ていない私に。そんなところで学んでも、望むような学びは得られないだろうと、そんなことをずっと思いながら悩んでいた時に、チャック・スミスに出会ったので、聖書をここなら学べると。そう思って私は即決意をして、そしてアメリカに渡ってカルバリーチャペル・バイブルカレッジと言うところに入學したのであります。でも、その時には単純にただ聖書を学びたい、聖書を知りたい。それだけの思いだけで行きましたから、まさか牧師になるなんていうことは夢にも思いませんでした。牧師志望で、牧師になりたいからバイブルカレッジに行ったんじゃないんです。まだその時点でも牧師にだけはならない、なるつもりはないということで聖書だけを学ぶつもりで行ったのであります。でも結果的には牧師になってしまったわけです。なりたくもなかった牧師になってしまったのも、これも今から振り返ると大いなる祝福でありました。そこで晴れて妻とも結婚できました。結婚してから牧師として働くべくアメリカからまた帰国をして、そして不思議な導きがあつてこの長野に導かれて来ました。それはすべて私が頑張ったからじゃないんです。私が望んだからでもない。求めてからでもない。何度もお伝えしている通り、牧師になるつもりなんかさらさらなかったんです。結婚するつもりもさらさらなかったんです。20 代で殉教して華々しく散るように世を去るつもりだったんです。でも神はそんな若気の至りの私の愚かさをよく知っていましたので、願い通りにはさせずに、むしろ願いを遥かに超えて、思いを遥かに超えて、願っても無いようなことを、夢にも抱いたこともないようなことを祝福として私に注いで下さったのであります。私が優れていたからでもない。私が有能だったからでもない。勝手なことを考え、勝手なことをやって、そして全く神から祝福を受けるに値しないようなそんないい加減な私に、かわいそうにと感じてイエスは憐れみをかけて下さったのであります。

ですから皆さんもイエスの傍にいて、イエスの憐れみを受けて、そして驚くような、信じられないような、夢にも見たことのないような祝福に与るといふことを是非知って頂きたい、是非味わって頂きたいと思います。1 番手っ取り早いのは教会に身を置くということです。なるべく教会に身を置いて下さい。ここから離れないで下さい。勿論この教会だけと言っているのではありません。どの教会でも構いません。イエスの名によって集まる場所ならばどこでも構いません。イエス・キリストがその教会の頭で、教会はキリストの体であるところならばどこでも構いません。必ずそ

こにイエスがおられます。イエスの傍にいれば必ずイエスはあなたを見て、あなたを憐れんで、あなたに祝福を注いで下さいます。もちろん教会だけがイエスのいる場所ではありません。

もう一つ、イエスは聖書の御言葉の中にいつも見出すことが出来ます。ヨハネ 5:39 にイエスがこう言われています。『あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。』聖書はイエスについて証言しているイエス・キリストの証言集です。イエスについて知りたければ聖書を開いて下さい。聖書を開く目的は、イエスを知るためです。それ以外の目的で聖書を紐解こうとしないで下さい。イエスを知る目的以外で聖書を開いても、<sup>ちんぷんかんぷん</sup>珍紛漢紛だと思えます。的外れな読み方です。何かここに答えがあるんじゃないか。何かここにハウツーものが、解決が、問題を解く鍵が。勿論そういう思いで最初は開くかもしれませんが、でも本来の聖書の存在目的というのは、救い主イエス・キリストを知るためのものであります。イエス・キリストこそがあなたの問題の解決者なのです。私たちは問題の解決ばかりを求めます。でも問題の解決者を求めるべきです。そのほうが余程良いんです。救いばかりを求めるかもしれませんが、救いも素晴らしいですけれども、それ以上に素晴らしいのは救い主です。救い主を得れば、あなたは1度ならず2度も3度もこれから一生ずっと永遠に渡って救われ続けるわけです。救いはその都度、その状況、その機会、そのピンチ、その時その時に与えられるものですけれども、でもイエス・キリストさえ得れば、もう全てを得たと同じなわけです。このことはローマ 8:32 にも書いてあります。『私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が(ひとり子をお与えになった父なる神が)、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。』ひとり子は父にとっては全てです。ひとり子は父の命よりも大切な存在です。全財産を失っても、ひとり子だけは失いたくない。そのひとり子を父は私たちに与えられたわけです。御子が与えられたということは、全宇宙はもう既に私たちに与えられていると同じことでもあります。等しいことです。ですからイエス・キリストを知るために聖書を開いて下さい。イエス・キリストを知るために教会に来て下さい。それ以外の目的で来れば、きっとがっかりすると思います。きっと幻滅すると思います。きつとつまずくと思いますし、きつと行き詰まると思います。イエス・キリストを知る目的でなければ、聖書を読もうと、祈ろうと、献金しよう、奉仕しよう、いくら教会に通おうと、バイブル・スタディーに出席しよう、活かされることはありません。

テキストに戻って頂いて、マタイ 15:32 にもう一度目を戻して下さい。そこでもう一度注目して頂きたいフレーズは、『イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた。』という言葉です。これは四千人の給食の記事です。一方で14章に記録されている五千人の給食の記事では、弟子たちがイエスに声をかけています。弟子たちがそこに居合わせた群衆たちの状況を見て、心配しているわけです。イエスに何とかして頂きたい。ところがこの15章の四千人の給食の記事では、弟子たちはそのデカポリスの群衆たちを見ても何も感じていません。三日間も飲まず食わずでイエスと一緒にいる、空腹なのは分かっている、お腹もグーグー鳴っている、だんだん体力も落ちてきている。見れば分かることです。にもかかわらず、弟子たちは知らんぷりです。別にデカポリスの異邦人たちが、不信者のノンクリスチャンのような人たちが、別にお腹を空かせようと、苦しんでいようと、大きな必要を抱えてようと、別に関係ない。弟子たちは知らん顔です。三日間も空腹な状況を見ながらも、全く弟子たちは無関心です。異邦人なんかどうだっていい。明らかに異邦人を差別しているわけです。苦しんでいたって知らん顔。まったく憐れみのカケラもない状態です。

その一方でイエスはどうだったか。イエスは弟子たちを呼び寄せて言われたんです。弟子たちは何も言わない。でも、イエスはここで発言したわけです。この3日間というのは、たぶん弟子たちが何かを言うのをイエスが待った期間だと思えます。もし弟子たちが「主よ、この群衆は1日もう何も食べていないんです。」と言ったら、すぐにでもイエスは動かれたと思えます。でも、敢えてイエスは弟子たちを試されたわけです。結局弟子たちは3日経とうと、きつと30日経とうと、そこで餓死して異邦人たちが干からびて死んだとしても何も思わなかったと思えます。何も言わなかったと思えます。でも、そうなつてはあまりにもかわいそうだから、もう3日が限界だろうということでイエスがここで初めて動かれるのであります。この3日のインターバルはただ単にデカポリスの人たちを苦しい目に遭わせてただけではありません。限界を感じてイエスが3日を限度にして動かれたのであります。でもその敢えて待った三日間という

のは、弟子たちが如何に憐れみに欠けた者かどうかをハッキリと見せつけるためでありました。その一方でイエスは憐れみ深い方、憐れみに富んだ方、憐れみに溢れている方です。それとは対照的にイエスの弟子たちは憐れみのかけらもない、微塵もない、全然憐れみなんか見られない。その対照的な姿を、そのコントラストをここでイエスは明らかにされているのであります。

勿論弟子たちのことだけを指さして非難するわけにはいきません。私たちはどうなのか。私たちも憐れみに溢れているかどうか。それとも憐れみに全く欠けている者かどうか。ここで考えなくてはいけません。自分に当てはめなくてはいけません。例えばノンクリスチャンを見て、イエスを信じていないような非キリスト教世界を見て、外国人を見てどう思うか。クリスチャンが困っていたら、「かわいそうだな。すぐに何とかしてあげなければ。」でもノンクリスチャンが同じような状況を見ても、なんとも思わない。または日本人が困っていたら、「日本人だからかわいそう、同胞だから。」韓国人がかわいそうな思いをしていたらどうでしょうか。「韓国人なんか知らないよ。」朝鮮人が苦しい思いをしていたらどうでしょうか。アメリカ人だったらどうでしょうか。黒人だったらどうでしょうか。部落の出身だったらどうでしょうか。考えさせられます。人が困ってるならば、空腹ならば、苦しんでいるならば、私たちは心を閉ざしてはいけません。**第一ヨハネ 3:17** を開いて頂きたいと思えます。『**世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見ても、あわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょう。**』皆さんにも問いかけたいと思えます。チャレンジしたいと思えます。また**ヤコブ 1:27** にはこう書いてあります。『**父なる神の御前できよく汚れのない宗教は、孤児や、やもめたちが困っているときに世話をし、この世から自分をきよく守ることです。**』「私はこの人たちとは付き合いをしないんです。だから別に強盗に襲われて、身ぐるみ剥がされて、ボコボコに殴られて瀕死の状態を負っている人が路上に倒れていても、別にこの人たちとは、私は何の付き合いも、何の関わりもないんです。ユダヤ人じゃないですか。」このサマリヤ人はそうは思わなかったんです。このサマリヤ人はイエスがおそらく実話として話されたことですが、このサマリヤ人は付き合いもしなかった、犬猿の仲であったユダヤ人が、強盗に襲われて、身ぐるみ剥がされて、そしてボコボコに殴られて、もう瀕死状態、死にかけている。その姿を見てかわいそうに思ったんです。その姿を見て内臓が揺れ動いたんです。ユダヤ人とサマリヤ人は付き合いをしなかった。むしろユダヤ人からはサマリヤ人は見下されていたんです。犬呼ばわりされていた。混血だと。もともとは同じ兄弟です。もともとはイスラエル人です。北イスラエルの人たちが周辺の異教徒と雑婚をして、異教徒とイスラエル人が結婚して、そして生まれてきた子供がサマリヤ人です。でも、ユダヤ人同士で結婚して生粋<sup>きんすい</sup>だったその南ユダのいわゆる生粋のユダヤ人から見ると、混血のイスラエルの民はサマリヤ人、異教徒だ、異邦人だ、汚れている。そんな者とは同じじゃないし、付き合うつもりもない。サマリヤ人もそんなことを言われたら勿論気分が悪いわけですから、ユダヤ人とは口も利かない。そんな間柄にもあったにもかかわらず、この良いサマリヤ人は、グッドサマリタン”good Samaritan”と英語で言います。あのサマリタンズ・パースもそれも同じこの聖書の記事から取られています。憐れんだのです、付き合いが無かったのに、外国人なのに、犬猿の仲なのに、普段から見下されているのに。反日だ、反韓だ、反米だ、そんなことはどうでもいいわけです。かわいそうだ。憐れみの心を閉ざすわけにはいけません。何人だろうと、どの国の国籍を持ってしようと、クリスチャンであろうとそうでなかろうと、異教徒だろうと、仏教徒だろうと、イスラム教徒だろうと、ヒンズー教徒だろうと、関係ない。マザーテレサのように。それがイエスを知っている者であります。関係ない。イエスも関係ない。デカポリスの人間だろうと、「彼らは 3 日も私と一緒にいるのに何も食べていない。」腸がわななく、断腸の思いがする。彼らの必要に応えなければならぬ。」別に彼らはイエスに求めてもいないんです。助けてくれとも言っていません。でも、見たらもう黙っていられない。それが私たちの救い主であります。そしてその救い主イエス・キリストを信じる私たちクリスチャンも、同じでなければいけないんです。あの弟子たちのようであってはいけません。

テキストに戻って頂いて**マタイ 15 章**。弟子たちは自分たちが全く憐れみに欠けた者だったという事は、この出来事を通してきっと分かってくると思えますが、その弟子たちが一応イエスの指示に従って、イエスの命令通り動いているところにも目を留めて下さい。**36 節**のところに『**それから、七つのパンと魚とを取り、感謝をささげてからそれを裂き、弟子たちに与えられた。そして、弟子たちは群衆に配った。**』とあります。弟子たちが 7 つのパンといくつかの

魚を増やしたのではありません。これを増やされたのはイエス・キリストであります。そのイエス・キリストが増やされたもの、イエス・キリストが与えられたその祝福を、弟子たちはイエスから頂いて、そしてそれをただ配っただけです。これがイエスの弟子として私たちもやらなければいけないことです。私たちが7つのパンといくつかの魚を何千倍にも増やすのではありません。これを増やし祝福されるのは、イエス・キリストです。つまりイエス・キリストこそが祝福の源なんです。私たちが祝福の源になるのではないんです。私たちはわずかなさげ物で、それをイエスが何倍にも何百倍にも何千倍にも何万倍にもして、それを祝福として下さる。有り余るほどに祝福として与えて下さるわけです。それを弟子たちは単にそれを受けて、頂いて、それを配るだけです。私たちクリスチャンは何かを生み出すために働く必要はないんです。私たちはこれだけのニーズに応えなければいけないから、一生懸命リソース探しをします。なんとか生み出さなければいけない。どこから資金を集めなければいけない。自分たちの努力によって、知恵によって、計画によって。でも、それはイエスのやり方とは違うわけです。イエスは7つのパンといくつかの魚。それだけあれば充分です。5つのパンと2匹の魚、それだけあれば充分です。それをイエスの手に渡す時に、イエスはそれを祝福され、それを弟子である私たちは受け取るだけです。受け取ったら配るんです。私たちがやる事はただ配るだけ。今あなたの手にあるのはイエスが何倍にも祝福してあなたの手に残しているものです。それはあなたが生み出したものじゃないはず。あなたが創造して造り上げたものじゃないはず。ただ単に戴いたものです。戴いたものを配るだけ。それが弟子です。自分で自分の体を作ったわけじゃない。あなたが今手にしているもの、今持っているもの、それはあなたが作ったものですか。あなたが増やしたものですか。そうじゃないはず。ただ単に弟子たちと同じように、神が祝福して下さったものをただ手に受け取っただけです。それを自分の懐にしまわないで、どこかに隠さないで、しまいこまないで、それをただ配るだけ。それが弟子の仕事であります。で、『**人々はみな、食べて満腹した。**』とあります。満腹した。それは需要を遥かに超える状態を表す言葉です。もう吐くほどに食べたという表現です。腹八分目どころじゃないです。もうこれ以上食べられません、という状態まで彼らは食べることが出来たということです。ですから7つのカゴいっぱいになるほどの余りが出たわけです。受け切れないほどの、味わい尽くせないほどの祝福、それがイエスから私たちにもたらされる。そして私たちの手を通して、また必要を抱えている人たちにも届けられる。分かち合われる。シェアされるという事。カツカツという事はないんです。神が私たちに与えるものは、有り余るほどです。ですからこのことも是非信じて頂きたいと思います。私たちが何もかもすべて生み出す必要は無いわけです。ただイエスから受け取ったものを、空腹な者たち、必要を抱えている者たちに、分け与えるわけです。この給食の物語は五千人の給食と四千人の給食、わざわざイエスが同じ年の中で春と夏に2回行いました。ロケーションも違う、対象も違う、タイミングも違う、そこで使われているアイテムの数も違う、そこで余った物のカゴの種類も違いますし、その数も違う。いろいろな形でそれぞれの奇跡が、それぞれの意味をもって行われたということを皆さんも心に留めて頂いて、そして是非適用して頂きたいと思います。

最後に**エレミヤ 31:20** を読んでこの時間を閉じたいと思います。エフライムと言われているのはイスラエル人のことです。北イスラエルの最大部族がエフライムで、北イスラエルの人のことをエフライムと言ったりしますが、エフライムというのはイスラエル人全般を指します。『**エフライムは、わたしの大事な子なのだろうか。それとも、喜びの子なのだろうか。わたしは彼のことを語るたびに、いつも必ず彼のことを思い出す。それゆえ、わたしのはらわたしは彼のためにわななき、わたしは彼をあわれまずにはいられない。——主の御告げ。——**』エフライムというところにあなたの名前を入れて読んで下さい。私の名前を入れて読んでみると、「**菊地一徳は、わたしの大事な子なのだろうか。それとも、喜びの子なのだろうか。わたしは菊地一徳のことを語るたびに、いつも必ず菊地一徳のことを思い出す。それゆえ、わたしのはらわたしは菊地一徳のためにわななき、わたしは菊地一徳をあわれまずにはいられない。**」エフライム、そして彼と言う代名詞のところに、あなたの名前を入れて声を出して、声を上げて読んで下さい。神のハートがあなたにも伝わってくると思います。あなたを見て今晚、神は、イエス・キリストは、あなたを憐れまずにはいられない思いに駆られています。あなたのことはどうでもいいなんて微塵も思っていない。あなたの生活がどうなろうと関係ないとは微塵も思っていない。あなたの将来がどうなろうとそんな事は私に関係ない、絶対にそんなふうには思っ

ておられません。隣の人を見てもあなたは別に隣の人の生活がどうなのかとか、困っているだろうかとか、何も思わないかもしれません。でも神はあなたを見て憐れみずにはいられない。憐れみたくて、憐れみたくて仕方がない、とそう思っているんです。黙って見ていられないんです。そのような神のハートをしっかりと受け止め、そして神はあなたを祝福したいと願っていますから、是非その祝福の蛇口の下に身を置いて下さい。じゃんじゃん祝福のシャワーを浴びて下さい。あなたがそれを受けるに値しない者でも、それでもいいんです、構わないんです。なぜならば、あなたは神の子どもだからです。自分の子はどんな子でも自分の子です。あなたの言うことを聞かなくても、宿題をやらなくても、言いつけ通りにやらなくても、いたずらばかりしたって、あなたのことを馬鹿にしようと、罵ろうと、やっぱりあなたの子供です。あなたが腹を痛めて産んだ子です。その子供はあなたの憐れみの対象です。子供が空腹なのを見て、あなたの腸はわななくと思います。お腹を空かしている子供を見て、黙って見ていられますか。他人の子だっかわいそうに思うでしょう。ましては自分の腹を痛めた子供が苦しんでいるのを見て、辛い思いをしているのを見て、大きな必要を抱えているのを見て、黙ってはいられないと思います。私たちの神は、私たちを造った方。私たちを生んで下さった父です。私たちを憐れみずにはいられない方です。だからこそ私たちの最大の必要である罪の赦し、永遠の滅びからの救い、それをもたらすために必要な御子イエス・キリストの尊い命、それを与えて下さったんです。罪のない者の命を、私たち罪人の代わりに十字架の上で死なせることによって、私たちの罰は御子に負わされ、そして私たちは自分の罪の罰を受けずに、自分の罪の中に死なずに、滅びることなく赦しを受け、救われる。そうでなければ地獄で永遠に苦しむんです。そんな私たちを見ていられない。黙ってはいられない。それが憐れみずにはいられない父なる神様の思いです。ですから是非皆さんにも、このことをもう一度考えて頂いて、そして是非憐れみを受けた者として、憐れみを経験した者として、味わっている者として、今必要を抱えている人たちにも憐れみを示して頂きたいと思います。彼らはこのままでは滅んでしまいます。彼らはこのままでは永遠に滅んでしまうんです。このことでこれから皆さんの行動も変わってくると思います。もう黙ってはいられないと思います。黙認は出来ないと思います。放ってはおけないと思います。それが、この物語を通してイエス・キリストが私たちにも問うていること、促していることです。バイブル・スタディーを通して私たちが頭でっかちになること、それがイエスの願いじゃありません。この学びを通して、教会を通して、あなたが変わえられること。憐れみのかけらもない者が、憐れみ深い者に変えられること。父が憐れみ深いように、あなた方も憐れみ深くありなさいと、イエスはそのように私たちに問うているわけです。では今日はこれで終わりたいと思います。